

(延善御時月次御屏風歌)

躬恒

幽かりてほす山田の稲をほしわびて守る仮庵に幾夜へぬらん

(捨遺集)

秋の野に鷹狩

154 山田のおくての稲を刈りほして守る仮庵に幾夜へぬらん

(躬恒集)

数では目立たなかった『好忠集』だが、用語においてその特徴はきわだっている。あえて一般的ではない語、歌には用いられなかった語を使用することで個性を打ち出した好忠の詠歌を、「田」に関わる部分においても確認することができるのである。

好忠に次いで独特の用語を見ることができるのは、『惠慶集』の百首歌である。好忠の百首歌に触発されて作られたという事情は、その序文に記すところである。つまり、つまり、惠慶は好忠を意識しながらこの百首歌を詠んだのである。「ひつちほ」は「毎月集」にも用いられた語ではあるが、「田水」「田草」は『惠慶集』のみに用いられた語である。炎天下の田の草取りは農作業上重要かつ苛酷な労働である。『好忠集』は「毎月集」三二六八首によって、一年と各月の上旬、中旬、下旬に分けたそれぞれの折の歌を詠みまとめた。二月上旬の霞たなびく山田、下旬の苗代水、四月上旬の苗の生長、七月上旬に穂が立ち、中旬には中手の稲の穂が立つ一方で刈る、早稲を刈った後ひつちほが生える、下旬は山田を守る、と農作業を追って詠んだ好忠も、田の草取りには触れなかった。「田草」に着目したのは、惠慶の実見に基く関心からであろうか。

ここで、その集の命名からして「田」に関心の高そうな『千穎集』を見てみよう。用語としては、「山田」「こひち」「稲」「おどろかし」「稲負鳥」であり、「おどろかし」以外は「田」の歌としてはむしろ

平凡な用語である。「おどろかし」の歌は

30 秋の田のいねがちにのみ見ゆればやおどろかしをば人のたつらむ
というもので、「稲」と「寝」を掛けて「おどろかし」ということ
ばのおもしろさに拠った詠みぶりである。用語が「田」に関わるの
みで、「田」に関わる歌という視点でとらえる限りにおいては特徴
ある詠みぶりとは言えない。

三、まとめ

以上、平安中期の中下級官人であった歌人の歌を中心に、「田」に対する意識と詠歌態度について述べてきた。各人において対象となる歌の数が少なく不十分な点は否めないが、現段階では次のような指摘ができると思う。

- 。 「田」との関わりは主として歌題、屏風絵を介するものであり、実体験が表出することはほとんどない。
- 。 「田」の風景は序詞、掛詞の技巧に利用される場合が多い。
- 。 「田」に関わる和歌作品、和歌ともに、表面的な形や類型表現に流れるものが多く、踏み込んだ内容のものに乏しい。
- 。 用語面では好忠の積極的に新しい語を取りいれようとする姿勢が目立つが、その刺激を受けた惠慶も注目される。

〔平成九年十一月二十九日受理〕

りする積極的な意識はなかったと考えられる。

表Ⅱにおいて歌数が多いのは『貫之集』『順集』『好忠集』だが、『貫之集』は総歌数も多いので割合としては目立つものではない。割合の面から見ると『順集』が高いことになるが、これには前述した「碁盤歌」の存在が大きい。趣向的関心の成果であることも、一に述べたとおりである。『好忠集』は総歌数五八七であり、それに二十四首の割合は特に高いとは言えない。「毎月集」三百六十八首中二十一首が割合としては高いほうだが、「好忠百首」中二首は、数の面からは特に取りあげるべきところはない。

次に、語句に注目してみたい。耳慣れない語としては、「畦(あ)」「中手」「芒(のぎ)」「田子」「田主」「御田屋守」等が挙げられよう。「畦」を用いたのは、躬恒と順である。

あを

246このめはる時になるまでいはしろのあをたにもまだ作らざりけり

(躬恒集)

春

153荒らさじとうち返すらし小山田の苗代水にぬれて作る畦

(順集)

躬恒の歌は馬の毛名「あを」を詠み込んだ物名歌、順の歌は「あめつちの歌」の最初の「あ」を歌の上下にすえた沓冠歌である。いずれも「あ」の音をもつ語を探した苦心の作であって、田の畦を詠むことに主眼があったわけではない。

「田子」「田主」は働く民をとらえた語句である。『貫之集』の「田子」を用いた歌は、「雨降るに田植うる所」の詞書をもち、「延喜二年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」の内の一首である。「田主」の歌は、順の「碁盤歌」の春の部の歌である。農作業に忙しい姿に

目を向けたところ、他とは異なると思われる。貫之の「田」の歌が概して類型的であることは前述したが、「田子」の歌は絵に触発されたといえ農村生活に踏み込んだものとなった。順には

田の中に水をひく男あり

66遠山田種まきおける人よりもあせきの水はもりまさるらん

(碁盤歌)

71すき返し去年の苗代今年見て作りまつらん妹が荒小田

84我が田にはこのした水をまかせ入れて花のほひをたえずあらせん

85朝苗にまだとりあへず多かれればたづのこゑとも鳴きぬべきかな

等、働く者の立場に立った詠や働く者に目を向けた詠が「田主」の歌以外にもあり、貫之とのちがいをみることができよう。

「中手」「芒」「御田屋守」を用いたのは好忠のみである。「中手」とは、早稲と晩稲(おくて)との間に実る稲を言う。表Ⅱでは「早稲」も二例しかないが、これは「早稲田」四例あるように珍しいとは言えないであろう。「晩稲」は『古今集』以下六例見えるのに対し、「中手」はない。「芒」が屏風絵に描かれることは考えられないし、一般の貴族には稲を問近に実見するような体験はなかったと思われる。「御田屋守」も、その存在は知っていても、名称は一般的でなかったのではないか。実りを守ることから言えば「御田」である必要はなく、むしろわびしい山田を一人さびしく番をする景色のほうが趣深いであろう。

題しらず

よみ人しらず

307穂にも出でぬ山田を守ると藤衣稲葉の露にぬれぬ日ぞなき

(古今集)

表Ⅱ 「田」の歌に見る関連語句

※各歌集名の後の（ ）の中は対象歌数
※掛詞は意味ごとに数に入れた。

	勅撰集			私家集										計		
	古今集 (16)	後撰集 (13)	拾遺集 (10)	貫之集 (17)	忠岑集 (2)	躬恒集 (2)	能宣集 (5)	元輔集 (1)	順集 (15)	重之集 (7)	好忠集 ⁽²⁴⁾				惠慶百首 (5)	千穎集 (5)
											毎月集 (2)	好忠百首 (2)	順百首 (1)			
田田	2		2						2							6
春田			2	1					1							4
秋田	4	3	1	5					1					1	2	17
早稲田		1		1								1	1			4
山田(小山田)	5	7	4	5	2	1			3	2	6	2	1		2	40
門田											1			1		2
沢田											1					1
荒田(荒小田)	1		1	1			3		3		1					10
田水														1		1
苗代							1		2		1			1		5
苗代水		1					2		1	2	1					7
畦						1			1							2
堰									1							1
こひち									1						1	2
田草														1		1
種				1	1				2		1					5
苗(早苗)	2		1	2	1				1	1	3			2	1	14
稲	2	2	2	2		1	1			1	2				1	14
早稲											1			1		2
中手											1					1
晩稲	1			2		1				1	1					6
稲葉	2			1						1	2					6
穂	4		1	5							2	1				13
田の実	1	1					1	1		1	1		1			7
芒											1					1
ひつち(ひつちほ)	1	1									1	1		1		5
そぼづ	1	2	1								1					5
おどろかし		1													1	2
鍬										1						1
仮庵	1	1	1		1	1										5
なは(しめなは)															1	1
田子				1												1
田主									1					1		2
御田屋守(御守)											2					2
稲舟	1								1							2
稲妻	1			2												3
稲負鳥	2				1										1	4
しでの田長	1													1		2
作る	1		1	1		1	1		3		2					10
返す	2	2	2	2					4	1						13
播く(まかす)			4		1				2	1	1					9
植う	1			2					1	1				1		6
生ふ	2			1	1				1	1	2			1		9
守る	1	2	1	1	1	1			1	1	5		1			14
刈る	4	2	2	8		1			1					1		19
干す	2		1	1		1					2					7
扱く	1															1
計	46	26	27	45	9	9	9	1	34	14	43	5	3	14	10	

春は28%、冬はない。夏は「しでのにをさ」の一首、苗を夏に入れると三首となる。稲作は春先の田おこしに始まり、苗代作り、田植え、田の草とり、穂が出て刈り取り、稲を干し扱きとるまでの作業である。歌に詠まれたのは、春の田おこしと苗代にふれる以外、秋に集中していることは明らかである。実りの秋に関心がむかうのは当然とも言えるが、その詠みぶりからは、「田」「稲作」に対する実感のない歌が多い。

題しらず

よみ人しらず

817 荒小田をあらすき返し返しても人の心を見てこそやまめ

(古今集 恋)

は、「返し」を導く序詞であり、

ふたりの男に物言ひける女の、一人につきにければ、今一人
がつかはしける

よみ人しらず

268 明け暮らし守るたのみをからせつつ袂そほつの身とぞなりぬる

返し

269 心もて生ふる山田のひつちはほ君守らねど刈る人もなし

(後撰集 秋)

は、秋の田に題材をとった男女の恋のやりとりである。日常生活とは無関係であるからこそ、純粹に風流な景色として「田」を思い描き歌に詠み込むことができた面はあるだろう。

表Ⅱは、「田」に関わる歌に用いられた語句から関連の深いと思われるものをぬきだしてまとめたものである。田では「山田」が一番多く使用され、「秋田」がそれに次ぐ。「荒田」は「返す」と共に用いられることが多く、「種」は「まく(まかす)」、「穂」に「出づ」は慣用句的使用が目立つ。この代表例が貫之である。

こたかがり

16 秋の田の穂にし出でぬればうちむれて里遠みよりかりぞ来にける

81 朝霧のおほづかなきに秋の田の穂に出でて雁ぞ鳴きわたるなる

山田の中に小鷹狩したる所

233 秋の田と世中をさへわがごとくかりにも人は思ふべらなり

秋

261 返す袖まだもひなくに秋の田をかりがねさへぞ鳴きわたるなる

田の中に小鷹狩したる

448 人もみなわれならねども秋の田のかりにぞ物を思ふべらなる

田作れる所

475 荒小田を返す今より人しれず思ひほに出でん事をこそ思へ

513 綱はへて守りわたりつるわが宿の早田かりがね今ぞ鳴くなる

566 山かげに作る山田の木隠れて穂に出でぬ恋ぞわびしかりける

581 秋風のいなばもそよに吹くなへに穂に出でて人ぞ恋しかりける

山寺に行く道にてよめる

769 朝露のおくての山田かりそめに憂き世間を思ひぬるかな

以上、『貫之集』からの抜粋であるが、類型表現は明らかであろう。『貫之集』中歌に「穂」は五回使用されるが、それら全て、ここに示したごとく「穂に出」づという表現に用いられたものである。またそれは「表に出る、目立つ」の意をかける点も共通している。さらに、16・81は「穂に出」た後「かり」と続く。「雁」と「刈り」の掛詞である。「かり」は「狩」「仮」をかけることもあり、貫之は小鷹狩の屏風歌には「かり」の掛詞を用いることにしていたらしい。貫之集中歌には「田子」のように他には見えない語が使用されることもあったが、全体的な詠みぶりは類型表現に頼った、序詞、掛詞としての関わりであり、「田」を主題としたり特異な語句を用いた

順が晩年野洲郡にひきこもっていたことは、『安法法師集』の歌の詞書によって知られる。庇護者であった源高明の失脚後、和泉守の任を終えると、順は九年間にも及ぶ散位生活を送ることとなった。六十代になっていた順にとっては希望の光も見えない年月であったにちがいない。『順集』中「いづみに沈む我」「程もなきいづみばかりに沈む身」と詠むのは、この時代である。天禄三年の規子内親王前裁歌合では判者をつとめるが、その言に「今は草の庵に、なにはあしのけにのみわづらひこもりはれば、すべてわれ舟のひく人もなきさに捨てられおかれたらむ心ちなんしける云々」とあるのは、本居を近江に移しつつあったかとも想像される。『本朝文粹』に三通の申状が載るごとく、順はこの時代においても任官活動を行っており、隠遁とはほど遠い意識で生活していたと思われる。『順集』は個人的情報に乏しい家集であり、これをもって順の意識を断ずるわけにはいかないが、少なくとも順自身が田園生活を楽しんでいる歌はない。

②千穎集

『千穎集』は別田千穎字は疇という人物の和歌を、甥の春米一斛丸が選んだものと、序に記す。が、千穎の紹介部分を見ても何者かの創造による仮空の人物であることは明らかである。「穎」は穀物の穂先、のぎのこと、「疇」はうね、「春」はうすで穀物をつくこと、「斛」はますの意で、全て穀物に関わる。千穎を創造した人物の発想に「田」があつたのはまちがいない。『千穎集』中の「田」に関連する和歌は五首、全百四首に対する割合としては大きいとはいえない。語句も後に示すように特異なものも見えず、「田」に関しては作者の実感をこめた詠歌として目立つものもない。「田」に限っていえば、他の歌人の詠歌ときわ立った差は見られないと言つてよ

かろう。

二、「田」に関わる和歌

「田」の風景を詠んだ歌やそれに関連する語句を用いた歌をぬき出すと、そのほとんどは屏風歌等の実景を離れた詠歌である。好忠の「毎月集」も女性の立場からの詠があるごとく、純粹な好忠の詠懐ではない。古今集秋の部208番歌「わがかどに稲負鳥の鳴くなへに今朝吹く風に雁は来にけり」のような歌もあるが、これもよみ人知らずであり、平安中期の歌人たちにとっては「田」は歌題として与えられることが普通であった。

表Iは、三代集から「田」に関わる歌をぬき出し、季節に分けたものである。上段は部立で四季に分類されている歌数、下段は四季以外の部立の歌の内容によって四季に分けた場合の歌数である。これによれば、「田」に関わる歌の64%が秋の景であることがわかる。

表I 三代集における「田」の歌の季節

計	不明	冬	秋	夏	春	古今集		後撰集		拾遺集		計
						部立四季	以外四季	部立四季	以外四季	部立四季	以外四季	
16			5			2	2	1	1	3	3	11
13			8	1				4	5			25
10		1								1		1
39	2		25	1	11							39

平安中期歌人の「田」の歌について

原田 真理

『重之集』に、身分ある人の失意の中の死を詠んだ歌がある。

下衆にはあらぬ人、世の中に住みわびて、鋤鋤取りており立ちたる、ほどもなく死ぬるを見て

86 うち返し鋤の前歯にまみれつつ秋のたのみも長からぬ世に

農作業に従事することを選んだのは零落の果てであり、慣れぬ業に実りも少なく、挙句に早々と死に至るといふ、あわれな人生に感慨を催したものであろう。清和源氏でありながら官途に恵まれず「朽木」「埋もれ木」に自らをたとえる重之にとつて、失意の中の死は他人事ではなかった。「下衆にはあらぬ人」がどういふ思いで鋤を持つ決意をしたかは不明だが、重之にとつては新天地への脱出といった解放感・期待感など全く抱けない絶望的境遇として、その人を認識している。重之にとつて生きる場所はなくまで貴族社会、官人として活躍できる社会であった。いわゆる沈淪歌人たちが歎くのは官途の停滞である。彼らは、官を逃れてゆくべき価値観の異なる別世界などもたなかつたのである。本稿は、平安中期の官人であった歌人を中心に、「田」に対する意識を探ってみようとするものである。使用した歌集は、全て国歌大観所収のものによる。文字は便宜上漢字に変えた所もある。

一、「田」に関する和歌作品

① 碁盤歌

『源順集』所収の「碁盤歌」は、「双六盤歌」に続けて作られたもので、和歌で図型を描く趣向も「双六盤歌」同様である。「田」にまつわる歌が多いのは、碁盤の目が「田」を連想させたところから趣向として取り入れたものと考えられる。マス目の中に傾きを交互に替えながら斜めに和歌を書き入れたのは、「米」を浮かびあがらせる。漢字の「田」と「米」とを図形として描くのであるから、そこに用いる和歌の内容も関連するものでまとめようと発想するのも当然であろう。碁盤歌は五十首から成るが、このうち「田」に関連する内容のものは九首、マス目を描くのが四首、マス目の中に入れたのが五首である。交叉点の文字を共有するという厳しい制約を課されたマス目の方が多であるのに対し、列ごとに春、夏、秋、冬、思(恋)の部立を置いたとはいえ他に制約のないマス目の中の歌は%という割合は、順の碁盤歌全体を「田」で統一しようという意識がそれほど高くなかったことを示している。春の部に四首詠みながら秋の部には一首、恋の部0という結果は、「田」に対する関心が図形によって一時的に喚起されたものの、作成過程で薄れていった状況を反映したものであろう。